27

日本の敗戦直前後の医事雑誌と発刊事情

寺畑喜朔

敗戦により言論、出版の自由は回復された。回復されたというよりは自由が認められたというべきである。しかし、連合軍による占領下であったので諸制約が拘束として課せられ、サンフランシスコ講和条約後、ようやく拘束制限から回復したのである。戦時中、出版統制に政府と協同して出版事業を維持したのは日本出版会で、敗戦後この会は解散して日本出版協会が昭和二十年十月に設立された。日本出版会の用紙配給権は政府に移され、商工省に新聞出版用紙割当委員会が同年十一月設置され、出版界は戦後再建の第一歩を踏み出したのである。

演者は既に第九八回の本会において、戦時下の医事雑誌の廃止、統合の概要について報告した。今回は敗戦直前後の再刊、創刊の状況について調査検索したので、その結果を報告する。

一、国公立大学医学部機関誌の休刊・再刊

敗戦時の全国大学医育機関発行の学術雑誌十三誌の休刊と再刊の概要はつぎのとおりである。

◇北海道医学雑誌、昭和十九年十二月休刊―同二十二年四月再刊（北方医学に改題）◇東北医学雑誌、同十九年六月休刊―同二十二年三月再刊◇千葉医学雑誌、同十九年二月休刊―同二十一年一月再刊◇東京医学会雑誌、同十九年十二月休刊―同二十六年四月再刊（東京医学雑誌に改題）◇北越医学会雑誌（新潟）、同十九年九月休刊―同二十一年一月再刊（新潟医学会雑誌と改題）◇十全会雑誌（金沢）同十九年十二月休刊―同二十二年一月再刊◇名古屋医学会雑誌、同十九年十一月休刊―同二十二年四月再刊◇京都府立医科大学雑誌、同十九年九月休刊―同二十一年六月再刊◇大阪医学会雑誌、同十九年八月休刊―同二十四年七月再刊（大阪大学医学雑誌に改題）◇岡山医学会雑誌、同十九年六月休刊―同二十二年十月再刊◇福岡医学雑誌、同十九年九月休刊―同二十二年四月再刊◇長崎医学会雑誌、同十九年九月休刊―同二十三

年三月再刊◇熊本医学会雑誌、同十九年十月休刊―同二十二年三月再刊

以上のように、大半の機関誌は昭和十九年の後半に休刊となり、昭和二十一年に入り千葉、新潟、京都の三大学、二十二年には札幌、仙台、金沢、名古屋、岡山、福岡、熊本の各大学において機関誌が再刊された。遅れて昭和二十三年に長崎、同二十四年に大阪、東京医学会雑誌は最も遅れて同二十六年の復刊となった。

二、戦時下から休廃刊せず発行を続行した医事雑誌（医歯薬関係）

「日本医事新報社」の日本医事新報、「南山堂」の治療、「日本医学雑誌株式会社」の綜合医学（戦時医学改題）、臨牀耳鼻咽喉科、臨牀皮膚泌尿科、医学総覧、医薬通信、歯界展望、歯科学雑誌、「日本臨牀社」の日本臨牀、「大道館出版部」の臨牀と研究、「西日本医界社」の週刊西日本医界、「日本薬報社」の日本医薬

三、敗戦の翌二十一年医事雑誌の出版界は、活気の兆しを見せ始めた。その先鞭は医歯薬出版の「医学のあゆみ」（三月）の創刊である。ついで金原出版が「医学」（六月）を創刊、また、同七月にはアメリカ医学の最新情報誌として「日米医学」（民風社）、中央医学社がAmerican Medicine（和文）を創刊し、アメリカ医学の進歩ぶりに接し、以後日本医学は積極的にアメリカ医学を吸収することとなる。

以上、敗戦直前後のわが国の医事雑誌の発刊事情を概観し、敗戦の悲惨なことを改めて再確認した。ここで、強調しておきたいことは、昭和十九～二十年に発刊されている医事雑誌は紙質粗悪かつ不統一で長期保存には耐え難く、また、バックナンバーの欠号が著しいことである。心すべきことである。

（金沢医科大学）